

中国の大規模オープンオンライン教育の現状と日本語教育

—MOOCs における JPC 開講に際して—

劉 佳琦

要 旨

近年、世界規模でオープンオンライン教育がブームになっている。中国においてもオンライン教育が前例のない勢いで発展を遂げ、伝統的な対面式教育に大きな影響を与えている。そんな中で、日本語教育の領域においてもグローバル MOOCs 初の日本語発音講座が開講され、2 万人以上の受講者が集まり、話題を呼んでいる。本論文では日本語教育の立場から、まず中国における大規模オープンオンライン教育及びオンライン日本語教育の現状について述べる。次に JPC の「世界の日本語音声教育」中国語編において紹介されている中国人日本語学習者を対象とした日本語音声教育の特徴について述べる。最後に「併用型音声教育形式」を提唱し、大規模オープンオンライン教育の学習リソースを生かした日本語音声教育の可能性について述べる。

キーワード

日本語音声教育 MOOCs Japanese Pronunciation for Communication (JPC)
中国人日本語学習者

1. はじめに

グローバル社会に向けての「教育の公共性」が問われる今日、オープンオンライン教育が世界中で注目されている。2012 年は MOOC 年 (the year of MOOC) と呼ばれるほど、その勢いは伝統的な教育形式 (いわゆる学校での対面教育の形) を覆すものだった (柴改英 2014)。MOOCs (Massive Open Online Courses) では、Massive (大規模) と Open (オープン) がキーワードになっていて、誰でも、いつでも、どこでも、自分のペースで学習できる。しかもリアルタイムにフィードバックを得る。すべてを可能にした理想的な学習リソースとなっているようである (陈肖庚・王顶明 2013)。それに対して戴朝晖 (2015) では、MOOC ブームを冷静に見直す必要性を指摘した。人間の認知メカニズムにおいては、

専門知識やスキルの習得とピア活動や実践的応用のバランスを十分に保つ必要がある。そのため、対面式教育とオンライン教育を併用させた教育形式が提唱されている。

日本語教育の分野では、グローバル MOOCs の edX において、世界初の日本語講座 Japanese Pronunciation for Communication (以下、JPC) が開講された (戸田 2016、2017)。世界中の日本語学習者を対象に、発音のポイントの解説やフィードバック、世界の日本語音声教育を無料配信してきた。受講者数は2万人を超えて、PopularCourse となっている。中国では「学堂在線 (XuetangX)」からも当該コースにアクセスできるようになっている。そこで本論文では、「学堂在線 (XuetangX)」をはじめとする中国の大規模オープンオンライン教育の現状と日本語教育コースの関連情報を報告する。そのうえで、中国人日本語学習者における日本語音声習得の特徴と指導上の注意点について述べる。最後にオンライン教育のリソースを生かした日本語音声教育について提案する。

2. 中国における大規模オープンオンライン教育の現状

MOOCs は「津波」や「教育の嵐」と言われ、高等教育の領域に大きな技術革新をもたらした。本論文では、中国オープンオンライン教育大手の「学堂在線 (XuetangX)」、「滬江網」、「網易雲課堂」をピックアップして、その経営基盤、方針、システム及び日本語教育関連コースの種類と数などの現状について述べる。

表1 中国オープンオンライン教育のプラットフォーム (一部)

	名称	URL	開発者
1	学堂在線 (XuetangX)	http://www.xuetangx.com	中国教育部オンライン教育研究センターと清華大学
2	滬江網	http://class.hujiang.com	滬江教育技術株式会社
3	網易雲課堂	http://study.163.com	網易公司 (163.com)

2.1 「学堂在線 (XuetangX)」

「学堂在線 (XuetangX)」(以下、「学堂」)は中国でのローカル MOOC プラットフォームで、中国のユーザーに高品質のアカデミックな教育リソースを無料配信している。「学堂」は中国教育部オンライン教育研究センターと清華大学の共同開発によって実現され、現在 IT 関連、マネジメント関連、生命科学、歴史、外国語など 20 種類、全 1085 コースが開講されている。協定校は清華大学、復旦大学、スタンフォード大学などの 17 校で、edX 協定校と協力機関はハーバード大学、MIT などの 44 か所である。外国語教育の 72 コースのうち、日本語教育の関連コースは 6 つ開講されている。そのうちの 5 つは清華大学日本語学科が提供する『日本語と日本文化』コースと漢字や会話の技能別コースで、もう一つは edX が提供する JPC である。受講人数がもっとも多いのは『日本語と日本文化』という総合日本語コースで、4.4 万人に達している。JPC はここ最近開講されたばかりなので、受講者数がまだ集計されていない。



図1 JPC on「学堂在线 (XuetangX)」

また、同じく「学堂」の姉妹版として開発された「雨課堂 (Rain Classroom)」¹はパソコンと携帯やiPadなどの移動端末に連動して、オンライン教育と対面式教室授業をサポートするシステムで、教育業界で好評である。教師の授業PPTが学生の携帯アプリケーションと連結し、習得難易度及び練習解答の正誤判定が瞬時に担当教員にフィードバックされる。このようなデータの立体化が対面式授業の活性化につながっている。



図2 The “Rain Classroom” icon in Microsoft Powerpoint 2016

2.2 「滬江網」

「滬江網」は社会人向けの大手オンライン教育プラットフォームである。そのために、外国語学習、留学、進学、職場の資格に関連するコースが幅広く提供されている。ほとんどのコースが有料である。学習の個性化・差異化・個体化という教育理念に基づいて、2000名余りの講師と契約し、2万講座以上の個性あふれるコース展開に力を入れている。また、担任制というTAシステムを導入することによって、個体化学習が徹底的に行なわれている。さらに、移動端末の開発のおかげで、随時学習が可能となり、利用者数は8300万人に達している。その学習者たちは「移動する学習者」と呼ばれている。そのほか、「滬江網」のCC-Talk²ではBBSなどを利用して、リアルタイムに講師とコミュニケーションが取れる活動参加型コースも人気が高いようである。

日本語学習の関連コースについては、上海外国語大学専任講師などの優秀な人材を確保し、ゼロスタートからハイレベルの学習者向けの83コースが設けられている。総合型と技能型日本語コースのほか、『アニメの日本語』、『美食日本語』、『日本方言』、『旅行のための日本語』などバラエティに富んだコースデザインとなっている。その中で日本語の発音訓練に関しては、『新版轻松掌握五十音』(新・楽に五十音マスター)³というコースがある。

全部課程																
日本語																
全部	日语入门		日语能力考试		基础日语		资格考试		实用日语		日语口语					
考试目标:	N1	N2	N3	N4	N5	A-D	E-F	其它								
当前水平:	零基础		有基础		N1	N2	N3	N4								
学习内容:	初级上册		初级下册		中级上册		中级下册		高级上册		高级下册	阅读	听力	综合	词汇	语法
开班时间:	已开班		4月开班		5月开班		6月开班									
班型:	VIP定制班		小班		大班											
课程品牌:	Hi Japanese		沪江日语口语		其它											
使用教材:	新标准日语		其它													
文化场景:	影视动漫		美食日语		日本方言		旅游日语		留学生活		实用会话		考研筹备		职场提升	其它
课程组合:	单册课程		多册连读													
授课模式:	课件课		直播课		视频课		混合课									

図3 「滬江網」における日本語教育のコース展開

2.3 「網易雲課堂」

「網易雲課堂」は網易 163 社が開発したオンライン実用技能学習プラットフォームである。「職場再教育」というスローガンのもとで、ソフト開発、IT とマルチメディア開発、各種資格取得、外国語学習など、社会に適用するための実用型コースが 1 万講座以上展開されている。

日本語関連のコースについては、五十音の発音指導、総合日本語、技能別日本語、能力試験対策、アニメ日本語など、全 141 コースある。使用教材は《大家的日语 (みんなの日本語)》や《新版标准日本語 (新・標準日本語)》などがある。

3. JPC における「世界の日本語音声教育」中国語編

edX の JPC では、発音のポイントの解説やフィードバックのほか、「世界の日本語音声教育」というコーナーを設け、世界各国の日本語音声教育の現状及び母語背景の異なる学習者の日本語音声習得の特徴について、現場の教師による解説が配信されている。

筆者は中国の日本語教育現場において教鞭を取るようになって 7 年目になる。第二言語としての日本語の音声習得及び教育実践研究に力を入れてきた。教育実践現場から、学習者は発達段階によって発音習得の問題点が異なることがわかっている。入門期には単音やリズムの生成と知覚が困難であるが、学習が進むにつれて、アクセントやイントネーションといったプロミネンスの問題が顕著になってくる。筆者は関連分野の先行研究の成果を振り返り、JPC の「世界の日本語音声教育」というコーナーで、中国語母語話者における日本語音声習得について、単音、リズム、アクセント、イントネーションの習得の特徴及び指導法を次のように紹介している。

3.1 単音

学習初期段階の学生によく聞かれるのは「先生、「わたし」の「た」には点々がありますか?」というようなことである。これは有声・無声破裂音に関する問題なのである。中国語を母語とする学習者にとっては、知覚と生成の両方において、有声・無声破裂音の習得が難しいとされている。それは母語干渉に起因していると先行研究でたびたび指摘されている(杉藤・神田 1987 など)。「言語形式の焦点化 (Focus on Form)」⁴ (Long and Robinson 1998) の観点から考えると、日本語の有声・無声破裂音を指導する際には、母語または母方言及び日本語の音韻体系を明確に提示した上で、練習を行なうべきであろう。表 2 では日本語と中国の北方方言と上海方言における意味の区別に影響する破裂子音の音素対立の違いを比較している。母方言と目標言語である日本語の子音対立のズレが習得の混同を引き起こしていると考えられている。

表 2 日本語と中国北方方言と中国上海方言の破裂子音音素

		日本語	中国北方方言	中国上海方言
有声破裂音		b d g		b d g
無声破裂音	有気	p ^h t ^h k ^h	p ^h t ^h k ^h	p ^h t ^h k ^h
	無気		p t k	p t k

また、劉 (2005) の研究では、中国語母語話者における日本語の有声・無声破裂音の習得においては、母方言干渉以外に言語習得の普遍的特徴も影響していることが明らかになった。日本語有声破裂音の習得に関しては、母方言に有声・無声の対立を持つ上海方言話者の場合は北方方言話者より習得が早い。一方、日本語無声破裂音の習得に関しては、両方言話者に共通して混同しやすいことが明らかになった。したがって、指導においては、北方方言話者の場合は有声破裂音を新たな音として生成方法を指導する必要がある。一方、上海方言話者の場合は母方言に有声・無声の対立が存在するため、それを提示すると効果的であろう。また、無声破裂音の知覚に関しては北方方言話者も上海方言話者も習得が難しく、特に有声破裂音と語中無気無声破裂音の子音対立の聴取練習を行なう必要があると思われる。

それから、中国語母語話者の場合は、ラ行とナ行の発音の混同もよく見られる。特に広東省や四川省、重慶市出身の学習者の場合は、母方言の音韻体系の影響で、鼻音ナ行と弾き音ラ行の双方向においての混同現象がある。例えば、近畿地方の「奈良」は「らら」になったり、「奈良なら」は「らららら」になったりすることもある。しかも、知覚と生成の両側面において習得過程が一致しておらず、知覚はできるが、生成においては区別がつかない学習者もいる。

3.2 リズム

リズムにおいては、特殊拍の習得が一番問題になっている。「糧 (かて)」と「家庭 (かてい)」、「遺体 (いたい)」と「一体 (いったい)」、「汚染 (おせん)」と「温泉 (おんせん)」

といった特殊拍の習得問題は、知覚と生成の両側面において混同がよく見られている。現代中国共通語においては、長音と短音、促音と非促音のような持続時間に関わる音韻対立は存在しない。そのため、学習初期では中国語母語話者が長短音と促音の有無の知覚範疇境界⁵の基準が確立しておらず、混同がよく起こる。日本語の学習期間が長くなるにつれて、繰り返し音韻対立の音声刺激を受けていけば、範疇知覚の基準が安定し、生成においても母語話者の音声に近づいてくる。

また、日本語の撥音は中国語の鼻音と異なる性質を持っている(朱 2015)。MRI⁶による中国語/an//ang/の調音活動の分析結果では、母音/a/が後続鼻音との協働調音(co-articulation)の影響で、調音部位の前後移動が顕著である。日本語の/aN/の場合は、母音/a/は一定の独立性を保ち、後続鼻音に影響されることはあまり顕著ではない。そのほか、中国語の鼻音の「韻尾」⁷と比較して、日本語の撥音は持続時間においても独立性を見せている。

リズムの指導においては、音韻対立から導入した方がいい。つまり、長音や促音だけを指導するのではなく、長音と短音、促音と非促音、撥音と非撥音のペアといった音韻対立の音声刺激を用いて、同定(identify)や弁別(discriminate)テストを体系的に行なうと効果的であろう。

3.3 アクセントとイントネーション

超分節レベルにおいては、アクセントとイントネーションといったピッチの高低と変動に関する発音の習得が難しいとされている。特にアクセントに関しては、学生によく聞かれるのは、「先生、単語リストに載っているアクセント型と実際文章に現れるアクセントが違うように聞こえますが、どうしてでしょうか」などであるが、アクセントへの意識の高さが窺える。母語の中国語は声調言語で、声の高低によって言葉の意味が変わることは学習者もよく知っている。また、劉(2012)の研究は、母方言の声調体系の異なる中国語母語話者の場合は、日本語アクセントの習得においても差異があることを指摘している。しかし、残念なことに、名詞アクセントのほか、複合語や形容詞、動詞のアクセント規則を体系的に指導する教育機関の数が非常に限られているというのも事実である。

指導の際には、アクセント規則を積極的に導入するほか、必要以上に声の高さの上げ下げせずに、一つのチャンク⁸として生成することを注意すべきである。さらに、リズム・アクセント・イントネーションの指導の際に、音響分析ソフト Praat⁹を利用した演習授業で、ピッチ曲線を抽出して、アクセントやイントネーションの高低具合を目で観察・比較させると効果的であろう(劉 2014)。

4. 併用型音声教育形式の提唱

edXにおいて配信されているJPCが世界中で高評される中、中国の日本語音声教育でも積極的に取り入れるべきであろう。そこで、MOOCsのオンライン教育リソースと対面式教授形式を併用させた教育スタイル、いわゆる「併用型音声教育形式」を提唱したい。

発音指導は退屈なイメージはあるが、教師の工夫次第でバラエティに富む教育活動を通

して、効率よく発音の上達を目指すことができるはずである。復旦大学の日本語学科においては、学部2年生を対象として『日語語音学』という授業を開設し、効果的な発音指導を試みている（劉 2014）。中国においてはこのような発音に特化した授業はまだ数が少なく、注目されている。この授業は、1) 母語との差異の理解、2) 発音の学習方法の指導、3) 発音のモニター力の育成の3点を考慮し、デザインをした。学期終了時にアンケート調査を実施した結果、この授業を通して学んだことについて「自然な発音」(85.5%)、「発音の学習方法」(70.1%)、「音響分析ソフトの利用方法」(68.0%)という回答が上位を占めていることがわかった。

そして、JPCの開講に際して、2017年度春学期から履修生にJPCコース内容を授業前に視聴させ、音韻知識や発音規則の導入部分にあてている。対面式授業では、個別の質疑応答や発音の応用練習を行なう。その場合は、会話文、文学作品の朗読、テレビ番組のナレーションなどの素材を使って、シャドーイングという発音の練習方法を積極的に授業に生かしている。発音への意識と自己モニター能力の向上、そして授業が終了しても継続的に学習ができるように発音の練習方法を習得してもらうということを目的としている。

5. まとめと今後の課題

本論文では、まず中国における大規模オープンオンライン教育及びオンライン日本語教育の現状について述べた。次にJPCの「世界の日本語音声教育」中国語編において紹介されている中国人日本語学習者を対象とした音声教育の特徴について述べた。最後に「併用型音声教育形式」を提唱し、大規模オープンオンライン教育の学習リソースを生かした日本語音声教育の可能性について述べた。今後は「併用型音声教育形式」の効果検証及び日本語音声習得研究の成果を生かした音声教育実践研究を模索していくつもりである。

注

- 1 <http://ykt.io> (2017年5月4日閲覧)
- 2 <http://www.cctalk.com> (2017年5月4日閲覧)
- 3 <http://class.hujiang.com/17339357/intro> (有料) (2017年5月4日閲覧)
- 4 外国語教育において、学習者に言語形式に注意を向けさせることである。
- 5 範疇知覚 (categorical perception) は言語音とそれ以外の音の知覚とを区別する重要な特徴の一つである。複数のカテゴリーにまたがるような違いに対して敏感に反応し、一つのカテゴリー内での違いには鈍感である (Ryalls 2003)。
- 6 Magnetic Resonance Imaging の略称で、磁気共鳴画像装置による動画撮影である。
- 7 中国語の音節は「声母」と「韻母」からなっている。また、「韻母」は「韻頭」、「韻腹」と「韻尾」からなる。通常、「韻尾」に現れるのは/n/, /ŋ/, /l/, /u/の4つの音素のどれかである。
- 8 人間の脳は音の波形に現れる個々の音素の特徴を拾うのではなく、時間軸に沿って、ある程度の長さを持つ音声連続 (音のチャンク) として、流れてくる言語を処理している。そのため、意味を持つ連続体を一つの要素としてまとめ上げた記憶方式が認知科学で提唱されている (中森 2016)。
- 9 <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> (2017年5月4日閲覧)

本論文は中国教育部人文科学研究基金青年項目（15YJC740045）による研究助成を受けた。
本論文は住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」（168053）による研究助成を受けた。

参考文献

- 朱春躍（2010）『中国語・日本語音声の実験的研究』くろしお出版
- 杉藤美代子・神田靖子（1987）「日本語と中国語話者の発話による日本語の無声及び有声破裂音の音響的特徴」『大阪樟蔭女子大学論集』24、pp.67-89
- 戸田貴子（2016）「MOOCs（Massive Open Online Course）による日本語発音講座—発音の意識化を促す工夫と試み」『早稲田日本語教育学』21、pp. 87-91
- 戸田貴子（2017）「グローバルMOOCsにおける世界初の日本語講座」『公共日本語教育学—社会をつくる日本語教育』、pp. 193-198
- 中森蒼之（2016）『外国語音声の認知メカニズム—聴覚・視覚・触覚からの信号』開拓社
- 劉佳琦（2005）「中国（北方・上海）方言話者による日本語有声・無声破裂音の知覚に関する一考察—初級学習者を対象として—」『早稲田大学日本語教育研究』6、pp. 79-90
- 劉佳琦（2011）『日本語有声・無声破裂音の習得及び教育』新星出版社
- 劉佳琦（2012）『日本語の動詞アクセントの習得』早稲田大学出版部
- 劉佳琦（2014）「中国における日本語音声教育の現状と課題」『早稲田日本語教育学』16、pp.105-116
- Jack Ryalls（2003）『音声知覚の基礎』（今富撰子他 監訳）海文堂
- Long, M. and P. Robinson（1998）Focus on form: Theory, research and practices. In Doughty, C. and William, J. (eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 15-41
- 柴改英（2014）「MOOC之于外语教育场域的思考—惯习冲击、协作创新、价值共建」『外语电化教学』157、pp. 32-37
- 陈肖庚・王顶明（2013）「MOOC的发展历程与主要特征分析」『现代教育技术』23、pp. 5-10
- 戴朝晖（2015）「MOOC热点研究问题探析—全国首届MOOC时代高等外语教学学术研讨会启示」『外语电化教学』161、pp. 73-78
- 朱春跃（2015）「汉日语音对比及日语语音习得研究—选题、方法与成果」『汉日语言对比研究论丛』6、pp. 35-47
- edX (JPC) <<https://www.edx.org/course/japanese-pronunciation-communication-wasedax-jpc111x>> (2017年8月27日閲覧)

（りゅう かき 復旦大学日語語言文学系）